

明治維新と噺家たち 江戸から東京への変転の中で

柏木 新 著

落語の変化・発展は政治と関係

政治と落語はかけ離れたもののように思える。しかし、著者は「落語の変化・発展は、その時代の社会・政治と無関係ではない」としている。

落語家は戦時下、「時局にふさわしくない噺」を「禁演落語」にして、浅草本法寺の「はなし塚」に「自主的」に葬った。

「形は落語界の『自粛』ではあるが、あきらかに軍部の干渉が存在していたのである」と、著者は言っている。

本書は江戸末期から明治まで、世の中が激変した時代の落語の歴史考察である。著者が膨大な文献を精査した貴重な資料だ。巻末のシニール・アダン著

『日本の噺家』（フランス語版 1887年発行）もすばらしい。著者がこのフランス語版を全文和訳している。アダンは明治20年前後に横浜に住んでいたフランス領事館の一等書記官。カラーの挿絵の美しさに目を奪われた。

天保の改革の後（1840年代後半）、初代都々一坊扇歌が政治批判した狂歌（川柳）が幕府の怒りを買った。風刺は現状批判につながり、為政者にとって都合が悪い。

明治時代になると、富国強兵を進める政府は「三条の教憲」（1872年＝明治5年）を発

令して、芸能の取り締まりを始めた。「明治の芸能への取締りが、大正・昭和へと引き継がれ、時の政府や軍部が戦争遂行に芸能を利用することに繋がっている」と、著者はみている。

1880年には集会条例が公布され、演説会が自由にできなくなったため、自由民権運動家が落語家や講談師になる動きが目立つようになった。演説や政談を禁止され、寄席の高座を利用するようになった。男尊女卑の時代に女性落語家第一号となった若柳燕嬢も自由民権運動家だった。

明治初期のインフレ、コレラの流行、日清・日露戦争。どこか現代と似ている。落語が抑圧されるような時代はいやだ。



本の泉社・1818円

かしわぎ・しん 48
年生まれ。話芸史研究家・演芸評論家